

山口県の窯業生産—その技術の系統—

渡辺 一雄

はじめに

失礼いたします。梅光学院大学の渡辺と申します。今日は少しお時間を頂きまして、お話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

基調講演ということでございますが、私は午後の三名の先生方のお話の前振り、前座ということでお話をさせていただきます。私の話は山口県域の窯業生産です。窯業にもいろんな種類がありますが、ここではやきものにしぼって、その生産の推移を駆け足でご紹介をしたいと思います。

1. やきもの

まず資料1をご覧ください。やきものはその材質、あるいは焼成法によっていくつかの種類がございます。研究者によっていろんな分類がありますが、一般的には資料1の最初に載せておりますように、5つぐらいに分けられています。

まず、土器があります。土器の原料は粘土で、基本的には^{うわぐすり}釉は使用しません。その焼き方ですが、窯は必要とせず、野外で浅い穴を掘って、成形した器を置き、燃料をそこに入れて焼くという、いわゆる野焼きのような形で焼成ができます。したがって、焼成温度というのは一番低いわけです。また、粘土自体は多孔質といいまして、穴（空隙）が開いておりそこから水が漏れやすいという特徴がございます。

2. 窯業生産の推移

資料1の下に窯業生産の推移という表があります。土器は、日本では縄文時代に始まり現代まで続いているやきものです。それぞれの時代に様々な名称があり、縄文時代の土器を縄文土器、続く弥生時代は弥生土器、そして古墳時代以降は土師器とされています。いま写真が出ていますのは縄文土器でございます。みなさんもよくご覧になったことがあると思います。それから、これが弥生土器ですね。縄文土器に比べますと少し模様が簡素で、模様のないものも登場します。土師器になると、もうほとんど文様はありません。こうした土器は保水率が低く、水を溜めていても自然に減っていきます。ですから、水が漏れないようにするために器面に炭素を付着させることで水を漏れにくくする黒色土器と呼ばれるものも出てきます。それから、表面をヘラで磨いて非常につるつるにして燻し焼きをする瓦器と呼ばれるものも出てきます。これらはいずれも、土器というひとつの種類になります。

続いて陶質土器ですが、これも原料は粘土です。一番大きく違うのは、ここで窯という施設が登場してそこで焼成することです。窯のなかで密閉して焼きますので還元炎焼成と呼んでいるんですが、とても温度が高くなるので非常に硬く、緻密に焼けるという特徴があります。土器のほうが少し赤っぽい色をしているのに対して、この陶質土器はねずみ色に近い色をしています。古来の日本ではこれを「陶器」と書いて「スエノウツワ」と呼んでいました。現在ではこれを「^{すえき}須恵器」と呼んでいます。

次に陶器です。これも陶質土器と似ていますが、大きく違うのは釉がかかっているということです。ガラス質の釉で覆うことによって、保水効果があります。日本では古代、7世紀後半に鉛を原料とした釉に色を発色させるために銅を混ぜて使う緑釉陶器というものが登場します。そのほか、中国の唐三彩をモデルにして奈良三彩、あるいは二彩というものが作られます。さらに東海のほうでは灰を原料とする釉をかける灰釉陶器というものが登場してきます。

次に^{せっき}炆器です。これも陶質土器や陶器とほぼ同様なんですが、さらに焼成温度が上がり、釉薬は基本的にはかけません。一部、釉薬を装飾的にかけることもあるんですが、基本的にはかけない。いわゆる焼締め陶器などとも呼ばれますが、こういうものを炆器と呼んでいます。資料1の2の表でいいますと、陶質土器の中世というところに備前や丹波、信楽など書いてますが、こういう焼物が炆器にあたります。

最後は磁器です。これは原料が石になります。陶石ですね。資料1には1350℃以上と書いてますが、1400℃以上ぐらいの温度になる場合もあり非常に高温で焼きます。今私たちがお茶碗として使っているやきもの、これが磁器です。磁器は江戸時代の初期に佐賀の有田で陶石の山が発見されて、朝鮮陶工によって生産が始まったといわれております。

それから他に、資料1の中世のところですが、土器の系統と須恵器系中世陶器と呼ばれている先ほどの焼締め陶器の備前、丹波、信楽、それから古代の須恵器に非常に似ている能登半島の珠洲、それから亀山ですね。こういうやきものがございます。陶器の系統のやきものは、^{しき}瓷器系中世陶器と呼んでいます。瓷器というのは最初に登場する緑釉陶器などをさします。これには瀬戸や美濃、常滑などがございます。従来中世のやきものでは六古窯、すなわち瀬戸、越前、常滑、信楽、丹波、備前などが非常に有名でございますが、考古学の発掘調査が進むと中世のやきものというのは六古窯だけではなくて全国各地で40、50ヶ所の生産地があったことがわかっています。

江戸時代も引き続いてこれらの種類の生産がおこなわれるのですが、新たな窯業生産として磁器生産が始まります。それから、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって朝鮮陶工をこちらに連れ帰りまして、それぞれの藩がそれを抱えて新しいやきもの生産が始まります。これを近世国焼などと呼んでおりますが、そういう新しい生産も始まっています。

また、こういった国内の生産とともに、青磁や白磁などの中国の磁器も大量に国内にもたらされました。

3. 山口県域における窯業遺跡の調査と研究

それでは、資料2から本題に入らせていただきます。山口県域における窯業生産について、どのような研究や調査がおこなわれてきたのかをお話します。

まず、窯業遺跡の考古学的な調査ですが、大正末年から昭和の初期にかけて、旧制山口高等学校が県内の遺跡や遺物の悉皆調査をおこないました。その折に、周防部（県の東部）に4ヶ所、長門部（県の西部）に1ヶ所の古代の窯跡が確認されています。また、同時期に小川五郎先生や伊藤作一先生らによって小野田上代遺跡の調査がおこなわれ、考古学的手法による初めての窯跡の調査が実施されています。

戦後の高度経済成長期になると、山口県も開発が非常に多くなります。特に山陽側で急速に開発が進み多くの遺跡が発見されました。その多くはすでに消滅し、窯業遺跡も同様なのですが、そのうちのいくつかについては不完全ながらも緊急調査が実施されております。資料2の中頃の発掘調査というところに、一覧表を載せております。小野田市の松山窯や防府市の末田窯など、これらの須恵器の窯跡が主要な例になります。

また、窯跡の保存のための分布調査や学術調査もおこなわれています。なかでも、その発掘調査の一番上のところ、1966年（昭和41年）から1968年（昭和43年）にかけておこなわれた旧須佐町（現在の萩市）にあります須佐唐津窯の学術調査は、全国に先駆けておこなわれた近世窯、江戸時代の窯の学術調査として注目すべきものです。それから、萩焼古窯の学術調査ですが、1976年から1988年にかけて11次の調査がおこなわれています。この調査は全国的に非常に評価されるもので、萩の松本にあります坂窯や長門の深川窯などの発掘調査がおこなわれ、窯の構造や製品の変遷など、萩焼の歴史をとらえる上で非常に画期的な調査でした。それから、資料2の下の方の遺跡詳細分布調査の覧を見てください。昭和57年度（1982年度）に山口県教育委員会によって窯業関係生産遺跡分布調査がおこなわれました。県内に窯業遺跡がどの程度残っていて原状どうなっているかを把握するための調査がおこなわれたのですが、そこで103個所の窯業遺跡が確認されております。その中で江戸時代のものは82個所でした。

以上の考古学的な調査によって、山口県域の窯業遺跡の展開や窯業の歴史的推移についてある程度見通せる状況になっていると思います。

一方、古文書史料を中心とする窯業史研究ですが、特に江戸時代の窯業の歴史的、技術的推移についての研究は進展しております。明治時代の近藤清石先生によります萩焼や須佐唐津焼の起源研究。昭和前半期の小川五郎先生によります防長陶磁史の体系化をおこなった研究。戦後の山本勉弥先生の萩の陶磁器の研究。桂芳樹先生の岩国藩の焼物の研究。そういうものが展開していきます。さらに、河野良輔先生による萩焼の沿革についての研究。榎本徹先生による萩焼研究などにより、その後の研究も進展、深化していると思われます。そうしたなかで私が特に注目したいのは、山口県立美術館で1981年におこなわれた「古萩―その源流と周辺」という展覧会です。萩焼の源流であります朝鮮の李朝の高麗茶碗とその系譜につながる九州諸窯の初期の資料が展示され、その比較の中に萩焼というものをとらえようとした。非常に注目すべき展示であったと思われます。

以上のような研究や展示がおこなわれていますが、やはり古文書の資料調査というのはまだ不十分ではないかと思っております。窯業の生産体制や後ほど話題になると思いますが、職人の移動やあるいは流通ですね。そういう経済史的な面、あるいは社会史的な面についての課題はまだ多く残されていると思っております。

4. 古代の窯業生産

ここからは山口県域の窯業生産の代表的なものを紹介したいと思います。資料3以降にお話したいことをほとんどすべて書いていますので、時間的に十分お話しできない場合はお帰りになって目を通していただければ有難いと思っております。

〔山口県域の須恵器生産〕

まず古代の窯業生産ですが、須恵器の生産についてご紹介したいと思います。須恵器は成形するときに初めて轆轤^{ろくろ}という道具を使用いたします。そして、窯を作りまして1100℃以上の温度で灰色に焼き上げた陶質土器でございます。日本には5世紀前半に朝鮮半島から伝わります。特に朝鮮半島の三国時代に半島南部の伽耶^{かや}と呼ばれる地域の技術が伝わり、日本でも生産が始まります。当初はヤマト政権の中枢部、5世紀に巨大な天皇陵がつくられる大阪南部の和泉の陶邑というところで一元的に生産され、そこから須恵器生産技術が各地に伝搬したと考えられています。もちろん、古い初期の窯跡は北部九州を中心にいくつか発見されていますが、陶邑を中核として生産がおこなわれたと考えられています。

さて、山口県では大体6世紀の後半から7世紀の初頭ぐらいに須恵器生産が開始されたと考えられています。初期の窯跡については防府市の敷山、あるいは向山や大判池などで窯跡ないしはその痕跡が確認されています。長門部では山陽小野田市の須恵にあります松山窯や宇部市の花ヶ池などがこの時期の窯跡として知られております。それから、1982年に実施された窯業関係の生産遺跡分布調査では、前述の窯跡も含めて18ヶ所ほどが山口県内で確認されています。阿武郡などでは少し状況がわからないんですが、だいたい旧郡にひとつは窯跡が点在するという状況だったのではないかと考えております。

ところで、須恵器の粘土の部分^{たんど}を胎土と呼んでいますが、その胎土の科学的な分析によってある程度は須恵器の産地が推定できるのですが、その結果から山口県における須恵器生産の背景については、想定することができると思われます。

例えば、山口市大字陶にある陶古窯群。資料3の主要な窯跡群というところの一番上に、陶古窯群というのを紹介しています。想定では、50基以上の窯跡があるんじゃないかなと思われそうですが、100基以上あると言われる方もいらっしゃいます。県内では最大規模の窯跡群です。さらには防府市の末田窯跡群。これらの窯跡から出土した須恵器の胎土分析がおこなわれました。その結果、そこで生産された須恵器は、古代の周防国の役所があった周防国府、あるいは造幣局（お金をつくる役所）があった山口市の鑄銭司の遺跡から出土するものと非常に似ているという結果が出ているのです。ですから、この二つの生産地から主として周防国府や周防の鑄銭司（じゅせんし）に須恵器が供給されたと考えられます。また、胎土分析はなされていませんが、山陽小野田市にある須恵古窯群や下関市と豊浦町の境のあたりにあります稗尻古窯群の製品も、やはり長門国府などに供給された可能性があります。美祢市美東町の末原古窯群の製品は、当時の国営の鉱山でありました長登銅山への供給が考えられます。さらに、現在長門市になりますが、旧日置町にある峠山（たおやま）という窯跡群は、大津郡の郡司を務めたと考えられる日置（ひおき）氏との関係が考えられています。

以上をみると、須恵器生産というのはやはり国や地方豪族と非常に密接なかかわりがあるということが推定できます。今後須恵器の編年研究、すなわち時代の尺度を作っていくような研究や、あるいは窯跡の発掘調査がもっと進んでいけば、より詳細な須恵器の生産体制や供給関係、そういうものが明らかになると思われれます。

そして、山口県の古代の須恵器の生産は、陶古窯群のひとつであります旧小郡町（現在の山口市）

にある百谷1号窯という窯で終焉を迎えます。その時期について私は9世紀後半から10世紀初頭までと考えていたんですが、最近の研究では9世紀後半までと考えられていますので、古代の須恵器生産は9世紀の後半には終わるということになります。

資料3に主要な窯跡群で、陶古窯群、末田古窯群、須恵古窯群、末原古窯群、峠山古窯群について若干の説明を書いております。ここで注目すべきは、上の4つの名前ですね。すべて「スエ」という字がついています。須恵器は文献では「陶器」（すえのうつわ）というふうに出てまいりますので、おそらくこういう地名がやはり残っていくんだろうと考えられます。下は山口県内の須恵器窯跡の分布をあらわした図面です。

〔長門瓷器（緑釉陶器）〕

資料4をご覧ください。古代のやきものについて、もうひとつ非常に特徴的なやきものがございます。長門瓷器（しき）と呼ばれるものでございます。平安時代の延喜式という資料に、年料として、つまり朝廷に献上するものとして、瓷器というものを納める国が尾張国と長門国である、と書いてあります。尾張国と長門国から瓷器というやきものを納めていたわけです。

ではこの瓷器とは何かということで色々と研究が進んでいるのですが、これは緑釉陶器です。緑釉単彩陶器ともいうんですが、それだろうと考えられています。資料4の生産地に示していますが、最近では京都、洛北、洛西、それから摂津、近江、丹波といった関西圏。それから東海地方の美濃、尾張などで緑釉陶器の窯跡が発見されております。研究によりますと、関西の特に洛北や摂津の窯跡については関西一円の官衙（役所）に供給されたと考えられていますし、東海の窯については東日本に供給されたのではないかと考えられております。

しかし、長門瓷器についてはこれまで窯跡が発見されていません。よって、かつては幻の焼物といわれていたわけなんです。最近はその生産地について少し手がかりが出てきております。その手がかりというのは、緑釉陶器を焼くときの窯道具の存在です。三又トチンというものが出土するようになりました。これは、たとえば緑釉陶器のお碗を焼くときに重ね焼きをしますが、重ねた場合、焼くと器同士が釉でくっつきます。だからその間にこれを挟んで、接着しないように重ね焼きするものです。これが県内のいくつかの遺跡で見られています。ひとつは下関市の長府です。長府の安養寺地区から緑釉が付着した三又トチンの先端の部分が発見されております。それから周防国府や周防鑄銭司に隣接する東禅寺・黒山遺跡から三又トチンや緑釉陶器などが発見されております。こういうことから考えますと、山口県においての瓷器、すなわち緑釉陶器の生産は、国衙あるいは周防鑄銭司などの官衙（役所）に付設された工房で生産がおこなわれた可能性が高いと思われます。

では、どういうものが長門や周防の緑釉陶器なのかということなんですが、山口県や福岡県をはじめとする九州各地の遺跡から出土した緑釉陶器の中に、明らかに畿内や東海のものとは違うものがあるんです。その特徴は素地（きじ）が土師器質で、耐久性が非常に低く、形態も違うものがあります。現在はそれが、長門や周防で生産された緑釉陶器ではないかと考えられております。国立歴史民俗博物館におられました高橋さんの研究によりますと、長門産といわれるものは、9世紀の前半に製造が開始されて、どちらかというと京都のものと割と近いんですね。わりとつくりがしっかりしているものだと考えられております。これは下関市の新下関駅付近の秋根遺跡から出土した緑釉陶器

です。これは山口市阿東町地福にある突抜遺跡から出土した緑釉陶器です。こういったものが長門産の緑釉陶器だと考えられております。周防産のものはだいたい10世紀代のものが多いんですが、少し轆轤の成形が悪くて歪みも多く、ご覧のような緑の斑点みたいなものが見られるような特徴がありますので、肉眼でもある程度仕分けができるようになっております。以上が、古代の窯業生産です。

5. 中世の窯業生産

〔瓦質土器の生産と足鍋〕

中世の窯業生産についてご紹介をいたします。資料4の5です。中世の集落遺跡を掘ると、出土する土器や陶器類には中国で作られる磁器がごく少量みられることもあります。あるいは、広域流通品の常滑や備前、亀山などの国産陶器が少し入っていることもあります。しかし、圧倒的多数は在地産とみられる土器ですね。土師器あるいは瓦質土器とよばれるものが圧倒的な比率を占めます。

主な器種としては食膳具（食器）と煮炊具や調理器もあります。これらが在地産の土器です。それから貯蔵具や調理具の一部には国産陶器、そして食器あるいは贅沢品には中国産の陶磁器が使われるというような状況です。

この在地産の土器のなかで注目すべきは、やはり瓦質土器です。山口県では、14世紀から16世紀を中心に瓦質土器が盛んに使われますが、主要な器種は足鍋と呼ばれ、鍋の底に3本の足がついているもの、他にはすり鉢ですね。すり鉢には中に摺り目があります。それから鉢です。コネバチと呼んでいます。これは焙烙（ほうろく）です。焙烙は今で言えばフライパンみたいなもので、豆を炒ったりするものです。そのほか甕や、火鉢、湯釜、火入などのやきものがあります。

13世紀から瓦質土器が登場してますが、最初は羽釜ですね。足のついた羽釜、鉢、甕などが中心になります。14世紀以降になりますとこれに足鍋、あるいはすり鉢が加わって、瓦質土器の中心になっていきます。15世紀以降は湯釜、火鉢、十能、火入などが加わります。16世紀になると器種、生産量ともに増大し、瓦質土器生産の最盛期を迎えます。おそらくこの生産は、当時の領主であります大内氏と関係があるんじゃないかなと考えられています。大内氏が守護職を得て勢力を拡大していくなかで、それにあわせて例えば肥前や筑後や筑前、それから豊前、石見などでも瓦質土器が出土するようになります。17世紀の前半、江戸時代の初期ぐらいになると急に瓦質土器はなくなっていきます。

こういう動きをしていくわけですが、なかでも注目すべきはこの足鍋です。足鍋は資料4に「山口県域を中心に瀬戸内西部から中部にかけて分布する、室町時代の特異な瓦質土器」と書いていますが、山口県が一番多いですね。この足鍋が山口県の中世の窯業生産のひとつの特徴ではないかなと思われまます。しかし、長らく足鍋の生産地についてはわかりませんでした。わからないというか、推定はされていたんですけど、それは近世、近代の大生産地である防府市西部域の佐野が有力な候補地になっていました。その理由は、松崎天神社（防府天満宮）の前にある宮市という集落にいた合物商の売り物のなかに足鍋という製品が見えるわけです。兄部（こうべ）家というのが合物商を管轄していたわけなんですけど、その商圈は東は周南市、昔の新南陽市の富田というところから西は山口市の嘉川、北は山口市、昔の徳地町の堀という範囲。このあたりを商圈にしていって、そこの商人たちが製品として足鍋を扱っているわけです。

それから、周防一ノ宮の玉祖神社の祭礼に近世、近代の粗陶器の生産地であった佐野から奉納された三足の鼎（かなえ）と呼ばれる足鍋が使われています。この玉祖神社の神事では、佐野から奉納された足鍋を使って、アカゴメとシラゴメを炊くという神事がおこなわれます。そして、それに関わって神功皇后伝説があるということで、この佐野を中心とする地域が生産地ではないかと考えられてきました。佐野というのは防府市の一番西側のところ、佐野焼窯跡群とありますがその一帯です。しかし、これまで窯跡がはっきりしませんでした。ところが2000年に、長らくわからなかった足鍋の生産地、窯跡が佐野に近い防府市大道の岩淵遺跡と原遺跡で発見されました。岩淵遺跡では、31棟の掘立柱建物が確認されているんですが、その中で瓦質土器の窯跡が4基発見されています。同じく原遺跡でも、4基の窯跡が発見されています。これは、半地下式の小型の窖窯で、長さが2.5メートル以上、幅が1メートルから2メートルの規模です。岩淵遺跡の窯は13世紀から16世紀代のもので、はじめは羽釜、鍋、鉢、甕を生産し、のちに足鍋に変わっていきます。そして、多量のすり鉢を生産しているという特徴があります。原遺跡の窯は、14世紀から16世紀代のもので、羽釜、鍋、足鍋、鉢、甕などを生産しております。この成果ではじめて足鍋の生産地がわかったということです。

〔備前系陶器と常滑系陶器の生産〕

それから、その他の中世の生産についても少し手がかりになる事例がございます。山口県東部の柳井市伊陸（いのち）と岩国市祖生、この辺りは氷室岳（嶽山）という非常に有名な山がございますが、その周辺の農家や寺院に、伝世されている壺があります。これを見ますと15世紀から16世紀代の備前焼そっくりなんですね。それが現在までに50個ぐらい確認されているんですが、地元ではこのやきものは氷室岳の山腹で焼かれたという伝承があるんです。したがって、これを嶽山壺（だけやまつぼ）と呼んでいるんです。しかし、これが備前から持ち込んだものなのか、あるいは地元の伝承どおりなのかということで問題になっておりました。

資料5をご覧ください。少しその問題を解決する糸口が見つかってまいりました。1994年に山口県が山口市陶に動物愛護センターをつくるということで事前の分布調査がおこなわれたのですが、そのときに窯跡が発見されております。窯本体は調査をしておりませんが、前面にある灰原（灰や失敗したやきものを捨てるところ）の調査で玉縁口縁壺や端部平坦面をもつすり鉢など、すなわち13世紀の後半から14世紀前半の備前焼の強い影響を受けた焼物が出ているわけです。これは窯跡ですので明らかに焼いているわけなんですね。これが甕の口のところなんですが非常に特徴的です。端部をくるっと回して肥厚、厚くしていますね。これが備前焼の特徴です。

もうひとつ、萩市大井の山手のほうになるんですが、上七重というところから窖窯、半地下式の登窯が発見されております。調査はおこなわれていないんですが、そこから採集された陶器片のなかに、常滑焼の口縁の特徴を強くもっている甕と東播系須恵器と呼ばれる現在の兵庫県を中心としたところでつくられる須恵器系の中世陶器、さらにはその影響がみられるような在地産の土器などが発見されております。これが甕の口のところなんですが、常滑系の特徴を強く持ったものです。こういう窯の発見によって従来は国産陶器が移入された、つまり備前や常滑から持ち込まれたと考えられていた土器のなかに、もしかすると県内で生産されたものが含まれる可能性があるのではないかとということです。やはりこれが、中世の窯業生産の特徴になるのではないかと思います。

6. 近世の窯業生産

〔在地系の粗陶器生産〕

かなり時間が迫ってまいりました。駆け足で資料5の6の江戸時代にまいります。江戸時代の特徴は、やきものの生産が非常に活発におこなわれたことがひとつ。それから、様々なやきものの技術が導入されたということではないかと思われます。

まず、在地系の陶器生産で、おそらく中世から引き継がれると思われるような技術で生産されるやきものです。もうひとつは、朝鮮李朝系陶器と書いているんですが、秀吉の朝鮮出兵で連れてきた陶工によって開始されたやきもの。あるいは朝鮮系の陶工から技術を得て、国内の生産地から職人が移動してきたなどといった朝鮮系の陶器生産というのがあると思います。それから、畿内の京焼などの技術を使った陶器生産、さらには江戸時代に始まる磁器生産。こういう新たな窯業技術の導入がなされた時期にあたります。

江戸時代の主な窯業地について、資料5の6に地図を示しております。まず在地系の粗陶器の生産です。代表的なのは佐野焼で先ほどの足鍋の生産地と推定されているところです。佐野焼の中世の窯業生産についてはよくわからないのですが、江戸時代以降の操業の状況がわかってきています。江戸時代後期、天保12年には70軒の「壺焼」がいたという記録が残っています。生産品は土師質や瓦質の粗陶器が中心です。水甕、半挿、便壺から半風呂とよばれるもの、あるいは井側、藍壺、などの荒物という大型品、土鍋や窯、火鉢、土瓶、焙烙などといった小物など様々な製品を生産しています。それから、若宮神社の窯神様ですね。この神社を中心に、共同窯や、個人窯などが数十基存在したといわれていますが現在ほとんどありません。1、2基復元された小窯があるぐらいだと思います。これについては、午後の田畑先生のお話の中で少しあるかもしれません。その他に堀越焼ですね。それから、この豊北町では釜蓋というところに粗陶器生産の窯跡が残っております。

〔朝鮮王朝（李朝）系の陶器生産〕

それから、朝鮮王朝系の陶器生産ですが、この代表的なものは萩焼でございます。現在の山口県のやきもので一番有名なのはやはり萩焼です。1609年（慶長14年）に朝鮮陶工の李勺光、李敬によって萩松本に窯薪山御用焼物所として開設されたのがこの萩焼です。これは藩が設置した窯、藩窯です。そののち長門市深川の湯本温泉の近くの三之瀬にも三之瀬焼物所が開かれまして、特に前者を「松本焼」、後者を「深川焼」とも呼びます。萩焼は支藩である、長府、徳山、岩国の各藩窯にも深くかかわっており、多くの陶工を育てて国内の陶業を主導し藩内外にいくつかの萩焼系の生産地を成立させています。一番有名なのは松江藩で、松江を代表するやきもので楽山焼というのがあります。これは、長門深川三之瀬窯の陶工が創業したものです。

萩焼古窯の調査によって萩の松本窯、特に坂窯の調査がおこなわれました。詳しいことは資料6と資料7をご参照願えればと思うのですが、萩市街の西方に唐人山という山があります。坂窯はその山の西側の谷にあります。現在は、萩焼宗家の坂高麗左衛門さんの屋敷があるんですが、その隣接地に窯跡が残っています。1号窯は全体がほぼすべて残っているんですが、これが17世紀前半の古い窯だと考えられております。大口というのは焚口ですが、大口に12房の部屋が連なる連房式登窯です。

連房式の登窯というのは部屋が山の斜面に連なってつくられる登窯です。また、窯で火入れをしますと何昼夜もかかるわけですが、その間に雨でも降ったら窯は爆発して壊れてしまいますので、基本的には覆屋を備えています。窯跡を発掘調査すると窯の周辺に覆屋の柱の穴がずらっと出てきます。

それから製品です。伝世品としては茶陶器を中心に、萩の博物館や美術館などに所蔵されているものがあります。出土品は、初期にはこういう伝世品に似た茶碗類が結構多いですね。あるいは茶入などがございます。しかし、全体的にいうとむしろ雑器といいましょうか、日用品です。碗、皿、鉢、すり鉢などが大半を占めることになりますので、藩窯といっても幕府に献上するために焼くというような、お殿様の御用焼といった性格のほかにも、殖産興業的な意味合いがあったんじゃないかと考えられています。

さて、松本窯と深川窯はともに藩窯として出発するんですがその大きな違いは、深川窯は最初から自分焼（自家営業）を認められています。そしてのちに、庄屋支配に移されて民窯的な生産体制になってまいります。実は、萩焼がどの程度流通しているのか、また県外の遺跡でどのくらい出土しているかという調査をおこなったことがあります。その結果、大坂を中心とした関西と江戸、それから北陸の金沢の城下町、そういうところで萩焼が出ています。しかし、出土した製品のほとんどは長門の深川窯の製品でした。

萩焼の調査でわかったことは資料7にも書いていますが、まずは窯の構造で、18世紀の中頃を境に、つまり江戸時代の前半期と後半期で構造が大きく変わるということがわかっています。また、連房式登窯の形態ですが、割竹型の連房式登り窯、これは竹を半分に割ったようなものが上部構造にあるような登窯ですね。それから後半には芋虫形です。各房が独立してコウというものをもっていまして芋虫のようにつながっています。このような形に変化をしていく。それから焼成室も最初は傾斜面ですが、後半には段をつくり水平に作っていくなど窯の構造の変化があります。それから、後半には非常に大規模な量産型の窯が出てくる。そして、製品も同じように18世紀の中頃を境に大きな変化をみせることがわかっています。

もう時間がなくなってまいりましたが、朝鮮王朝系の陶器生産ということになりますと須佐の唐津焼がございます。資料7の終わりに書いていますように、開窯については様々な説があります。しかし、基本的には江戸の初期に佐賀の唐津のほうから古唐津の技術を導入して、江戸時代初期に窯が築かれたのではないかと。そして、その生産は萩藩の永代家老であります益田家の、いわゆるお抱え窯としての生産が考えられるということがわかってきました。

〔畿内陶技系の陶器生産（岩国藩）〕

資料8にそのほかの江戸時代の窯業生産について書いておりますが、時間がなくなりましたので詳細は資料をご参照いただきたいと思います。岩国藩の焼物は非常に特異でございます。河野良輔先生などの研究によりますと、当初は萩焼の陶工などと呼んで岩国藩の藩主の御用焼を焼かせたりしていたわけなんです、本藩と岩国藩が不仲になってそれができなくなったため、主として関西の京焼系の職人を雇って藩窯などを作ったといわれています。純粋な藩窯としては多田窯があります。錦帯橋の少し奥のほうなのですが、多田窯を補填するような形で吉向窯というのもつくられています。

〔磁器生産〕

それから磁器生産です。これが豊北町と非常に関わりが深いわけなんです。まず、村田清風が主導する藩政改革の一環として、萩の小畑に磁器窯が興ります。寿久山国本窯などの初期は京焼の技術が入っているんですが、のちには肥前系の職人の技術の導入によって磁器生産が始まります。幕末になると、ご当地の北浦の諸窯、それから周南市の戸田窯などで磁器生産が開始されます。ご当地の磁器生産について、資料9に表をのせております。代表的な窯跡として、資料8の一番終わりに原窯の説明を少し加えております。

〔藩窯と民窯〕

江戸時代のこういった窯業生産は、形態からいいますと藩窯と民窯にわけることができます。たとえば、藩窯では萩藩の松本窯や長門の深川窯ですが、萩藩の上層クラスの家臣も同様にお抱え窯をつくっているわけです。先ほどの須佐唐津窯は益田家のお抱え窯でしたが、こういう藩窯というタイプと、それから純粋な民窯ですね。幕末期の豊北地域のやきもの生産には、初期は藩窯的なものがあるものの、この民窯という形でおこなわれます。流通については調査がほとんどおこなわれていないのですが、須佐唐津窯のすり鉢と鉢という特定の器種は、おそらく北前船によって金沢城下町から北陸、そして蝦夷地まで販売されたと考えられ、それが遺跡からも出土しております。したがって、幕末期のこういった磁器生産がどのような販路をもっていたのかということがこれからの検討課題になると思われます。

7. 近代の窯業生産

最後でございますが、資料10に近代の窯業生産について少し紹介をしております。近代になりますと、そのバックとなる藩や武士がなくなるわけですので、そういう藩窯的なものの存在はなくなり、衰退をしていきますが、民窯はむしろ江戸時代より窯業生産の規模は大きくなります。さらには、士族授産事業として、いくつか窯業生産が始まったりしております。しかし、窯業生産は全般的にみると非常に活発なんです、山口県内の窯業生産が非常に小規模であること、技術革新をはかる条件下にはなかったために、量産体制をとり非常に広域の流通圏をもっていた有田や瀬戸などの製品には対抗できなくなります。そのため、大正不況を境に県内の大半の窯場が廃業して、ずっと続いてきた県域の窯業生産もいったんは終焉を迎えることになります。

しかし現在、茶陶を中心とした陶芸に転換した萩焼、あるいは日用陶器生産の堀越焼、これも後継者がいなくて、非常に危ないという話を先ほど聞いたんですが、あとは末田焼などですね。そういうところでは現在でも伝統的な陶芸を続けている、さらに須佐唐津窯の復活や今日お話しになります豊北焼など、さまざまな地域で陶芸の復興というものも盛んにおこなわれている状況でございます。

この近代の窯業生産に関して山口県で一番特徴的だなと思うのが、小野田でおこなわれました硫酸瓶の製造でございます。小野田の日本舎密製造会社、現在の日産化学小野田工場で、硫酸や硝酸などをつくるようになりまして、それを運搬する容器として新たに出現したやきものの生産でございます。これが非常に特徴的だと思いますので、最後にそれをあげさせていただきました。

時間配分を大幅に間違えてしまい十分なお話ができませんでしたが、本日の資料をお目通しいただいて、古代から近代にかけての山口県のやきものの生産について、少しでも知っていただければと思

います。大変粗雑なお話になりましたが、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

《参考文献》

- 渡辺一雄編 1983『生産遺跡分布調査報告書―窯業―』 山口県教育委員会
渡辺一雄 1998「窯業」『山口県近代化遺産』 山口県教育委員会
山口県 2000『山口県史 資料編考古1』
渡辺一雄 002「窯業遺跡からみた山口県域の窯業」『地域文化研究 17』 梅光学院大学地域文化研究所
渡辺一雄 2004「生産遺跡解説」『山口県史 資料編考古2』
山口市教育委員会 2001『陶窯跡群Ⅰ』

* 個別の参考文献は省略しました。上記の文献に明示しています。

1 やきもの

区 分	原料	釉	素地 (きじ)	焼成温度	焼成法	施設
土器 (どき)	粘土	無	多孔質・吸水性	750～850℃	酸化炎焼成	焼土坑
陶質土器 (とうしつどき)	粘土	無	多孔質・吸水性	1100℃ 以上	還元炎焼成	窯
陶器 (とうき)	粘土	有	多孔質・吸水性	1200℃ 以上	還元炎焼成	窯
炆器 (せつき)	粘土	無・有	密質・吸水性無	1300℃ 程度	還元炎焼成	窯
磁器 (じき)	陶石	有	密質・吸水性無	1350℃ 以上	還元炎焼成	窯

2 窯業生産の推移

年 代	土器	陶質土器・炆器	陶器	磁器	備 考
縄 文	BC.1 万 縄文土器				縄文革命・鉢主体
弥 生	BC.600 弥生土器				水稻農耕・器種多様 (甕・壺・鉢・高坏など) 土器焼成土坑(下東・下右田)
古 墳	AD.300 土師器 400 500 600 	須恵器 			須恵器：渡来の新技術 (窯・ロクロ・釉薬) 周防：敷山・向山・大判池 長門：松山・花ヶ池
古 代	700 — 800 黒色土器 900 1000 瓦器	 	緑釉 三彩 灰釉 		食器の体系、大陸輸入の 陶磁器 (青磁・白磁) 長門瓷器
中 世	1100 (瓦質土器) 1200 1300 1400 1500 	須恵器系 中世陶器 (備前・丹波・信楽) (珠洲・亀山) 	瓷器系 中世陶器 (瀬戸・美濃・常滑) (唐津)		中世六古窯 (瀬戸・越前・ 常滑・信楽・丹波・備前) 足鍋 (佐野・岩淵・原) 陶・七重の備前・常滑 宋・元・明の輸入陶磁器 李朝系陶器の輸入
近 世	1600 1700 1800 	 	近世国焼 	磁 器 	茶碗戦争、朝鮮陶技の導 入、磁器の誕生 萩・須佐唐津・佐野など多様 な窯業生産

3 山口県域における窯業遺跡の調査と研究

〔古代窯業遺跡の所在調査〕 ☆ 大正末期～昭和初期の旧制山口高等学校歴史学教室による県域の遺跡・遺物の悉皆調査。 周防部（県東部）で4ヵ所、長門部（県西部）で1ヵ所の古代の窯跡を確認。 （山口高等学校歴史教室『周防長門遺跡遺物発見地名表』1928年） ☆ 小川五郎・伊藤作一らによる小野田上代遺跡の調査。考古学的手法による窯跡調査の出発点。 （小川五郎・伊藤作一「長門国厚狭郡小野田の上代遺跡」『山高郷土史研究会考古学研究報告書』山口高等学校歴史学教室 1927年） 〔山口県の近世窯業の歴史的・技術的推移についての研究〕 骨格～明治期の近藤清石（主に萩焼・須佐唐津焼の起源研究） 昭和前半期の小川五郎（防長陶磁史の体系化、雄山閣『陶器講座』「防長陶磁沿革史」） 深化～山本勉弥（萩の陶磁器研究）・桂芳樹（岩国藩の焼物研究）・河野良輔（萩焼の沿革）・榎本徹（萩焼研究）など。 「古萩―その源流と周辺」展（山口県立美術館 1981年）～萩焼をその源流である李朝高麗茶碗やその系譜に連なる九州諸窯の初期の製品との比較の中にとらえようとした展示。		
発掘調査	1966～68年	須佐唐津窯（萩市須佐、近世陶器）の学術調査（小野忠熙・小田富士雄）
	1968年	峠山1号窯跡（長門市日置、須恵器）の緊急調査（予察調査）
1971年	1971年	松山窯跡（山陽小野田市、須恵器）の緊急調査
	1973年	殿敷窯跡（下関市豊田町、須恵器）の緊急調査
1974・78年	1974・78年	末田1号・2号窯跡（防府市末田、須恵器）の緊急調査
	1976年	百谷窯跡（山口市小郡、須恵器）の学術調査
1976～88年	1976～88年	萩焼古窯（萩松本：'76～80、深川三之瀬：'83～88年）の学術調査
	1977～79年	末原窯跡（美祢市美東町、須恵器）の学術調査
1982年	1982年	須佐唐津窯の再度の学術調査
	1985年	佐野宮窯（防府市、近世～近代粗陶器）の緊急調査
1986年	1986年	末田9号窯跡・敷山1号窯跡（防府市、須恵器）の緊急調査
	1987年	花ヶ池窯跡（宇部市、須恵器）の緊急調査
1990年	1990年	敷山3号窯跡（防府市、須恵器）の緊急調査
	1991年	上七重窯跡（萩市大井、中世陶器）の発見（分布調査）
1992年	1992年	大山田窯（下関市豊北町、近代磁器）の緊急調査
	1994年	峠山1号窯跡の学術調査
1995～97年	1995～97年	山口県動物愛護センター窯（仮称、山口市陶、中世陶器）を発見（分布調査）
	2000年	陶古窯群西の谷支群（山口市陶、須恵器）の緊急調査
2000年	2000年	岩淵遺跡・原遺跡（防府市、瓦質土器）の緊急調査
	・須佐唐津窯の発掘調査（須佐町教委）は、全国にさがけて行われた近世窯の学術調査。 （須佐唐津窯編集委員会『須佐唐津窯』須佐町教育委員会 1971年） ・萩焼古窯の発掘調査（県教委）は、そのスケールからも全国的に評価される学術調査。坂窯や長門深川窯の窯体構造や製品の変遷から萩焼の歴史をとらえた画期的な調査。 （西岡義貴編『萩焼古窯』山口県教育委員会 1990年）	
遺跡詳細 分布調査		1982年度に山口県教育委員会によって実施された窯業関係生産遺跡分布調査で103箇所の窯業遺跡（近世は82ヵ所）が確認される。
〔課題〕以上の諸研究や発掘調査などにより、山口県域の窯業遺跡の展開や窯業の歴史的推移、技術的側面の解明はある程度進展してきている。しかし、古文書等の資料調査は未だ十分ではない。窯業の生産体制や流通など経済史・社会史的側面については解決されるべき多くの課題が残っている。		

4 古代の窯業生産

山口県域の須恵器生産

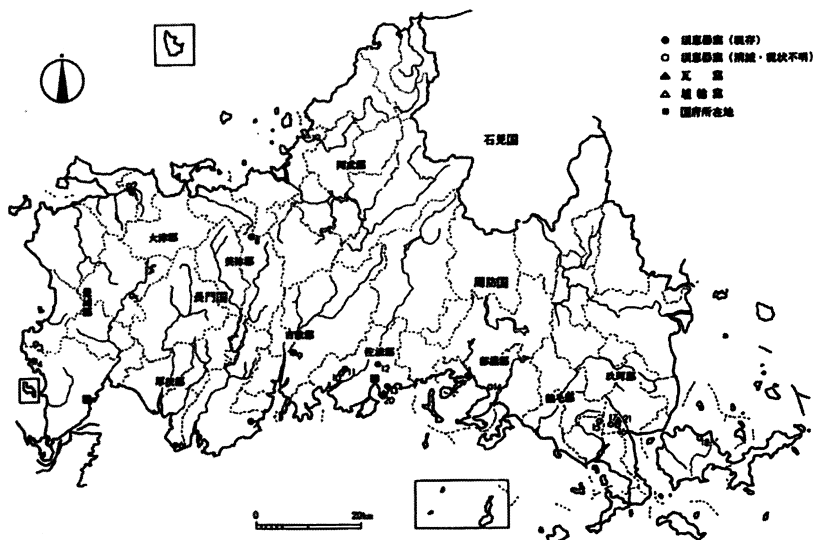
- 6世紀後半から7世紀初頭に須恵器生産が開始。
 - 周防部～敷山・向山・大判池（防府市）
 - 長門部～須恵古窯跡（松山窯、山陽小野田市）、花ヶ池窯跡（宇部市）
- 県域には18ヵ所の須恵器窯跡（群）が存在（窯業関係生産遺跡分布調査）。阿武郡を除く旧郡域に展開。須恵器生産が中央権力や地方豪族を背景に行われたことが想定できる。
 - * 陶・末田→周防国衙や周防鑄銭司などの官衙への供給（胎土分析）
 - 須恵・稗尻→長門国衙などへ供給の可能性
 - 末原→長登銅山（採銅官司）への供給の可能性
 - 峠山→大津郡日置（ひおき）氏との関連
- 須恵器生産は、9世紀後半の小郡町百谷（ももだに）1号窯で終焉をむかえた。

【主要な窯跡群】

陶 (すえ) 古窯群	山口市陶。周防部最大の須恵器生産地。7支群(百谷・大作・ハマリ坂・西の浴・八足原・陶峠・小池堤)。東西約2kmの範囲で窯跡21・灰原11・須恵器片散布地17などの遺構を確認。50基以上の窯跡によって構成か。8基の窯を発掘。向田1号窯(陶陶窯跡)は国指定史跡。8世紀前半～9世紀後半。
末田 (すえだ) 古窯群	防府市末田。周防国衙近郊の須恵器生産地。陶古窯群に次ぐ規模。窯跡11を確認。発掘調査は3基(1・2・9号窯)。7世紀後半～8世紀中頃。
須恵 (すえ) 古窯群	山陽小野田市須恵。長門部最大の須恵器生産地。7遺跡(焼野・南迫・東高尾・西高尾・奈良原・松山・薄笹)で10数基の窯跡が確認されている。このうち松山窯で部分的な発掘調査が行われた。6世紀後半～7世紀。
末原 (すえはら) 古窯群	美祢市美東町赤。古代の採銅所である長登銅山に近い須恵器生産地。5基の窯跡を確認(発掘は2号窯のみ)。県史跡。8世紀前半～9世紀前半。
峠山 (たおやま) 古窯群	長門市日置峠山。日置氏管掌下の陶造部の生産地(日置氏の本拠は堀田遺跡、工人集落は荒人遺跡)。3基の窯跡を確認。発掘調査は1号窯(全長約9mの半地下式窖窯)のみ。県史跡。7世紀後半～8世紀前半。

〔須惠器窠跡〕

- | | |
|------------|----------|
| 1 峠山古窯群 | 2 長行古窯 |
| 3 遠田古窯 | 4 稗尻古窯群 |
| 5 殿敷古窯 | 6 須恵古窯群 |
| 7 花ヶ池古窯 | 8 末原古窯群 |
| 9 陶古窯群 | 10 向山古窯 |
| 11 大判池古窯 | 12 敷山古窯群 |
| 13 末田古窯群 | 14 久米古窯群 |
| 16 八和田古窯 | 16 安行古窯 |
| 17 松が下古窯 | |
| 18 かまだ屋敷古窯 | |



長門の瓷器（ながとのしき、緑釉陶器）

- 年料として「瓷器」を納める国～尾張国・長門国（『延喜式』民部下）。「瓷器」＝緑釉陶器。
- 生産地～洛北（本山・幡枝・西賀茂窯）、洛西（小塩・石作窯）、摂津（紫金山窯）、近江（山の神窯）、丹波（篠窯）、美濃（永田窯）、尾張（黒笹窯ほか）など。
* 洛北や摂津は官窯で畿内一円に供給、尾張は主として東国の需要を賄った。
- 長門の「瓷器」窯跡はこれまでのところ未発見。「三又トチン」（窯道具）が長門国府跡（下関市）、周防国府跡（防府市）、周防鑄銭司跡東前寺地区（山口市）から出土。「瓷器」は長門国衙、周防国衙、周防鑄銭司などの官衙に付設された工房で生産が行われたのだろう。
- 遺跡出土の緑釉陶器から見る長門や周防の「瓷器」は、素地が土師質で耐久性低く、畿内や尾張の緑釉陶器とは明らかに違う形態を持つ。
長門産緑釉陶器～9世紀前半に生産開始。洛北産のものと類似し製作技術に優れている。
周防産緑釉陶器～10世紀代中。轆轤成形が悪く、歪みも多く、釉薬も濃緑の斑点が混じる。

5 中世の窯業生産

中世の集落遺跡で出土する土器・陶磁器類は、中国製陶磁器に代表されるごく少量の貿易陶磁と広域流通品である常滑・備前・亀山などの国産陶器を除くと、大半は在地産とみられる土器（土師器・瓦質土器）である。食膳具・煮炊具・調理具には在地産土器が、貯蔵具と調理具の一部には国産陶器が、食膳具と奢侈品の一部には貿易陶磁が使用された。



足鍋（下右田遺跡）

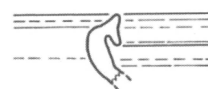
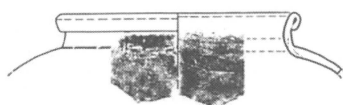
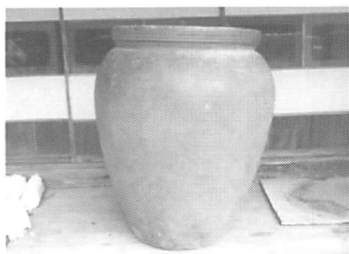
瓦質土器の生産と足鍋

- 山口県域では14世紀から16世紀を中心に瓦質（がしつ）土器が生産・使用された。
主要器種：足鍋（あしなべ）・すり鉢（搗鉢）・甕・火鉢・湯釜・火入・焙烙（ほうろく）など。
生産推移：13世紀～羽釜（足釜）・鉢・甕などの生産／14世紀以後～足鍋・すり鉢が中心
15世紀以降～湯釜・火鉢・十能・火入などが加わる
16世紀～器種・生産量ともに増大し、瓦質土器生産の最盛期（大内氏の関与）
防長地域に加えて肥前・筑前・豊前・豊後・石見にも分布圏を広げる
17世紀初頭～急激に生産を縮小し、すり鉢・火鉢・大甕の一部以外は姿を消す
18世紀前半～残存器種も消滅または陶器化、瓦質土器としての生産が終わる。
- 足鍋：山口県域を中心に瀬戸内西部から中部にかけて分布する室町時代の特異な瓦質土器。
生産地：防府市佐野を中心とする市西部域が有力な候補地。
・松崎天神のある宮市（防府市）の合物商の売物に「足鍋」が見える（応永11年「大内氏奉行人連署奉書案」兄部家文書）
・周防一ノ宮玉祖（たまのや）神社の祭礼に近世・近代の粗陶器生産地であった佐野から奉納された「三足の鼎」（足鍋）が使われた。神功皇后伝説。
・2000年に佐野に近い台道の岩淵（いわぶち）・原両遺跡から瓦質土器の窯が各4基発見。
- 岩淵遺跡：中世集落（掘立柱建物31・土坑88・粘土採掘坑2・瓦質土器窯跡4）
原遺跡：中世集落（掘立柱建物13・土坑69・瓦質土器窯跡4）
窯：半地下式の小形窖窯。長さ2.5～3m以上、幅1～2mの規模。岩淵遺跡の窯は13～16世紀代で、羽釜・鍋・鉢・甕を生産、のち羽釜から足鍋にかわり、多量のすり鉢を生産。原遺跡の窯は14～16世紀代、羽釜・鍋・足鍋・鉢・甕などを生産。

備前系陶器と常滑系陶器の生産

- 嶽山壺：氷室岳（高山寺嶽）周辺の柳井市伊陸（いかち）や岩国市祖生（そう）の農家や寺院に伝世されている、15～16世紀代の備前焼に酷似したやきもの。約50個確認。地元には氷室岳山腹で焼かれたという伝承があり、「嶽山壺（だけやまつぼ）」と呼ばれている。備前焼の移入品なのか、地元で生産されたのか結論は出ていない。

- 県動物愛護センター窯（仮称、山口市陶）：センター建設に伴う遺跡の分布調査（1994 年）で発見。酸化炎焼成による焼締め陶器を主体に生産か。灰原からの採集陶器片に、玉縁口縁壺や端部平坦面をもつすり鉢に 13 世紀後半～14 世紀前半の備前焼の強い影響。
- 上七重窯：窖窯（あながま）。14 世紀前半の還元炎焼成による焼締め陶器片が採集されている。常滑焼の「N 字状口縁」の影響を強く受けた甕と東播系須恵器の影響を受けた在地土器、丹波焼の影響を受けた「一本引き」の卸目を持つすり鉢など。
- これらの窯跡の発見は防長地域における中世の陶器生産の存在を明らかにするもので、従来国産移入陶器として扱ってきた遺跡出土陶器に在地生産品が含まれる可能性を示している。



動物愛護センター窯跡出土の甕

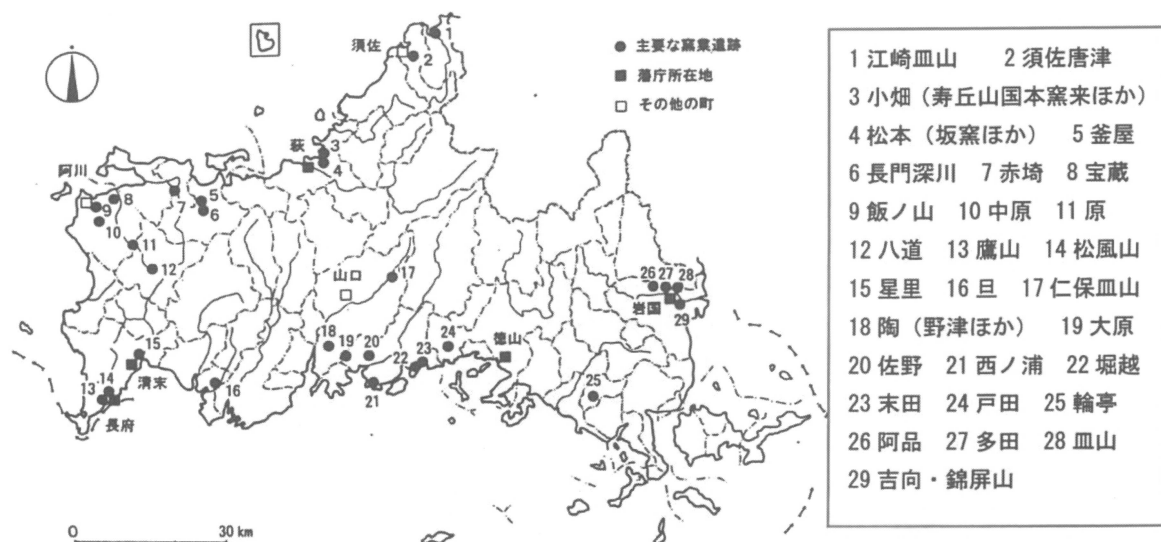
上七重窯跡採集の甕

←嶽山壺（周東町祖生）

6 近世の窯業生産

- ◎ 多様な窯業生産が行われた飛躍的な盛煙期。
在地系陶器生産＋朝鮮李朝系陶器・畿内系陶器・肥前系磁器などの新たな陶技の導入。
 生産遺跡分布調査では、82 カ所の窯業生産地が確認。

〔近世の主な窯業地〕



在地系の粗陶器生産

- 佐野窯（防府市）
 - ・ 足鍋など中世瓦質土器の生産地に比定。操業の状況がわかるのは江戸時代。
 - ・ 天保 12 年（1841）には 70 軒の「壺焼き」と銀 38 貫 500 目の収入（『防長風土注進案』）。
 - ・ 生産品は土師質や瓦質の粗陶器（水甕・半挿・便壺・半風呂・井側・藍壺などの荒物や、土鍋・釜・火鉢・土瓶・焙烙などの小物）。
 - ・ 若宮神社（玉祖神社摂社）を中心に大窯（共同窯）や小窯（個人窯）など数十基が存在したが、現在は数基の小窯が確認できるのみ。

大窯～1985年に宮窯の緊急調査。「鉄砲窯」(大窯)と呼ばれる平地窯の構造が判明。

小窯～未調査。全長約4mの平地窯で、内部はロストル式の構造。

- ・ 製品は県内の近世遺跡から普遍的に出土。在地を中心に瀬戸内・山陰・九州地方に供給か。
- ・ 佐野は、中世の土器生産の系統をひくと考えられる諸窯が、まとまった集団を構成しながら製品をつくり続けた例として、全国的に数少ない窯業地として重要。
- このほか、佐野の職人によって開かれたと伝えられる防府市堀越窯や、古代の須恵器生産地であった山口市陶、下関市豊北町の窯蓋などにも粗陶器を生産する小規模な窯場が存在した。

朝鮮王朝(李朝)系の陶器生産

【萩焼】

1609年(慶長14)、朝鮮陶工李勺光・李敬により萩松本に「窯薪山御用焼物所」として開窯された藩窯である。のち、深川三之瀬(ふかわそうのせ、長門市)にも「三之瀬焼物所」が開かれ、前者を「松本焼」、後者を「深川焼」と呼ぶ。

萩焼は、支藩である長府・徳山・岩国の各藩窯にも深く関わり、また、多くの陶工を育てて国内の陶業を指導し、藩内外にいくつかの萩焼系陶窯を成立させている。松江藩の雲州楽山焼は、深川三之瀬窯の陶工蔵崎権兵衛が創業したものである。萩近辺にも、松本焼物所のほか、蜂ヶ坂窯・赤穴窯・林窯・中津江窯・上古畑窯・下古畑窯など多くの萩焼系の窯が営まれている。

【萩松本窯跡】

- ・ 萩藩の「窯薪山御用焼物所」(藩窯)の跡。唐人山(標高474m)の西側山麓に開けた谷間(通称「坂ノ浴」)に所在。1976～1980年度の発掘調査。県指定史跡。
- ・ 御用細工人は李勺光、のち李敬(高麗左衛門、坂助八)、以後李敬系統が「惣都合」役を踏襲。1657年(明暦3)深川三之瀬窯の開窯、1663年(寛文3)三輪窯・佐伯(林)窯が御用窯へ。
- ・ 経営は藩庁御蔵元の直轄の純然たる藩窯。窯の修繕や窯覆屋の葺替え、細工場の建設経費など是一切藩費でまかなわれ、土掘の経費は藩庁呉服方からの融資(5年間無利息償還)。
- ・ 窯跡は、谷口部の斜面に3基、市道を隔てて坂家屋敷地内に1基が遺存。
 - 1号窯～大口+12房の連房式登窯。全長32m。17世紀前半。
 - 2号窯～推定8房、全長18mの連房式登窯。窯尻に近い2房のみ遺存。18世紀前半。
 - 3号窯～大口+10房の連房式登窯。全長24m。窯の西側半分が崩壊。17世紀後半。
 - 5号窯～市道により大半が破壊。大口の一部が残存。19世紀後半。
- ・ 物原 ～2号窯物原(2号物原)と3号窯上部の物原(所属不明、4号物原、18C後～19C前)。
- ・ 伝製品～「一楽二萩三唐津」、茶陶器が萩焼の代名詞。茶器や床飾りの上物が焼かれた。
- ・ 出土品～碗・皿・鉢・すり鉢などの雑器が大半を占める。殖産事業的性格もあったのか？
- ・ 陶土 ～小畑土(花崗岩質斑岩風化土)・松本土(石英粗面岩風化土)などの地土と大道土(花崗岩風化土)が主原土。薬石は古くは地石、現在は浮野石を使用。

【長門深川窯(長門三之瀬窯)】

- ・ 1657年(明暦3)に萩松本から分窯した「三之瀬焼物所」の跡。深川川支流三ノ瀬川が形成する谷合に所在。1982～1988年に発掘調査。
- ・ 1657年(明暦3)開窯。蔵崎五郎左衛門・蔵崎勘衛・赤川助左衛門・赤川同助右衛門など。藩庁御蔵元支配の藩窯であるが、「自分焼」(自家営業)を認める半官半民的な営業形態であった。1693年(元禄6)には庄屋支配へ移管され、しだいに民営的な色彩を強めていった。
- ・ 1763年(宝暦13)に赤川一族が共同で東ノ新窯を築窯。
- ・ 江戸後期の窯元数は12軒。年産38貫目の売上を記録。三之瀬は日用陶器を主体とする営業を続け明治に至り、現在は陶芸窯として陶業を続けている。
- ・ 三之瀬では他窯への職人移動も頻繁にあった。岩国藩では1683年(天和3)に三之瀬ノ茶碗師蔵崎・赤川・山村)が「焼物一釜」を仰せつかる。長府藩では三代毛利綱元の招請により赤川家の職人が藩窯へ差遣わされている。1677年(延宝5)には、蔵崎権兵衛が出雲松江藩に懇望されて楽山窯を興している。

- ・三ノ瀬の谷には側壁や天井部の残る保存状態の良い3基の窯跡がある。発掘調査ではさらに埋存する窯跡も検出され、合計9基の窯跡の存在が確認されている。
 本窯 ～1号窯（開窯期の窯、推定全長16m弱、大口+7房）→2号窯→3号窯と推移し、現在地表に残る窯は4号・5号窯（推定10房の連房式登窯、共同窯）。
 東ノ窯～東ノ新窯。宝暦13年に築窯された1号窯を拡張して2号窯が築かれている。大口と10房からなる全長36mの連房式登窯。
 西ノ窯～1号窯は窯尻部に近い5房が残る。10房からなる推定全長は18m弱の連房式登窯。
 大口に近い房は取り壊され、大正時代初期に新窯（2号窯）が築かれた。
 物原～それぞれの窯に残されているが、特に東ノ新窯のものは大規模。
- ・藩窯期には御用焼（茶器などの上物）も焼いていたが、主体は日用陶器。『防長風土注進案』に「往古より白堊の焼物を造り」とあるように深川では白釉（藁灰）を得意とし、青磁釉・天目釉・黄釉・海鼠釉など各種の釉色を出している。特に絞釉や江戸後期に用いられたピラ掛は独特のもの。19世紀には、三ノ瀬の製品が江戸・大坂を中心に移出されている。
 出土品～碗・皿・盤・鉢・瓶・壺・甕・仏具類その他と茶碗・茶入などの茶陶類。
 碗類は筒形碗・丸碗・広口碗・平碗・開口碗・端反碗をはじめ高麗茶碗を写した抹茶茶碗などⅨ類に、小碗類はⅧ類に、皿類はⅢ類に分類され、詳細な分析が行われている。
- ・陶土は、地土に大道土や金峯土を混用する。地土は御所原土・河原土と呼ばれる石英粗面岩の風化土。薬石は浮野石や地元の四瀬石を用いた。

〔萩焼古窯調査でわかったこと〕

- 11次にのぼる萩焼古窯の調査によって、合計10基の連房式登窯が発掘された。
 萩松本窯～坂1号・坂2号・坂3号・坂5号・林1号
 長門深川窯～深川東ノ新窯1号・深川本窯1号・深川本窯4号・深川本窯5号・西ノ窯1号
- 窯体構造および製品は、18世紀中葉を境に江戸時代の前半期と後半期で大きく変化する。
 窯体 ～横狭間式通気孔をもつ割竹形連房式登窯→芋虫形連房式登窯
 深川窯では礫石や天秤をドーム状に積み上げた量産型の大形登窯が登場
 焼成室～無段水平・砂床の床面→有段の正座を有する床面
 製品 ～器種構成や施釉技法が18世紀中葉を境に大きな変化をみせる。
 松本窯と深川窯の製品には、窯場の機能の差を反映した違いが認められる。
 江戸時代後期の深川窯では、量産型の大形登窯が登場し、製品も従来の土灰釉・長石釉・藁灰釉のほかに萩焼独特の藁白釉といった新しい釉薬の開発が行われた。特に、藁白釉開口碗とピラ掛け湯呑は松本窯にはない深川窯の特産品であり、藩外へも輸出され、半官半民の殖産興業的な性格の深川窯の発展に著しい寄与を行った。

〔須佐唐津窯〕

萩市須佐の唐津集落では、江戸時代初期に古唐津系技法を導入した窯が開窯され、その後萩焼の技法も加わって独特な陶器生産が展開された。

江戸時代には、須佐を領有していた萩藩永代家老益田氏のお抱え窯で、自家や本藩の御用焼を焼かせると同時に、陶器生産を総括する「役座」を置き、年間の生産量・規格・価格・問屋の指定・密売禁止など強い規制を加えていた。1758年（宝暦8）の「阿武郡須佐村石高由来境目書」によれば、細工人11軒、釜（窯）数25軒で、年間3度焼成し俵数1500、値段俵別160文前後であった。

遺構：江戸時代に開窯した古い窯跡は山神社南側に3基と、対岸「リョウの浴」に1基存在する。

3号窯～開窯期（17世紀）の窯。全長約28m推定12～13房の連房式登窯。割竹形連房式登窯。房は床が無段水平砂床で、幅約3m奥行き2.1～2.4m。

2号窯～益田家お抱え以後に新設された窯（後釜）。推定9房の窯で、窯尻部2房のみ調査が行われている。19世紀前半まで存続。

1号窯～「前釜」と呼ばれる推定16房の大窯。第3号窯の上に主軸を斜交させて築かれてお

り、大正期まで存続した共同窯である（大正期は 13 房）。18 世紀後半以降に築窯。

製品：土灰釉・藁灰釉・鉄釉などによる碗・皿・鉢・摺鉢（すりばち）・細工物などが主体。代表的な「須佐青磁」は、江戸時代初期の短期間にのみ生産。

物原下層～最下層（25～27 層）の古唐津系の叩（たた）き技法、24 層の「須佐青磁」が特徴的、灰釉や鉄釉を施した碗・皿・壺などの小型品が多い。

物原中層～灰釉（藁灰主体）の碗・皿類が主体。

物原上層～播鉢や土灰釉の鉢などが多くなり、器形は大形化している。

陶土：陶土・藁土は白須流紋岩類の風化土を利用。金子峠や大ヶ峠から採取している。

注記：1966～68 年（昭和 41～43）と 1982 年（昭和 57）に発掘調査。県指定史跡。

金沢城下町（安江町遺跡・下本多遺跡・昭和町遺跡・長田町遺跡・打木町東遺跡・高岡町遺跡・長町遺跡など）や富山県、新潟県の日本海沿岸部などから須佐唐津産のすり鉢や鉢が出土している。北前船の西回り航路を使った特定製品（播鉢・鉢）の流通が盛んに行われていたことが推測される。

畿内陶技系の陶器生産（岩国藩）

岩国藩には、多田・皿山・吉向（岩国山）・錦屏山・阿品などの諸窯が知られている。これらは主に藩の主宰により開窯されたものである。多田窯は藩窯で純然たる御用窯であり、その補助的な役割を吉向窯や皿山窯が担っていた。またその技術系統は、他の防長諸窯と異なっている。それは、開窯の契機が萩藩との不仲であり、藩御用品として使用していた萩松本焼や深川三之瀬焼の製品が供給されなくなったため、藩は御用品の需要をみたすため、独自に孤立的に築窯焼成しなければならず、主に京焼技法の導入を図ったためである。このように岩国藩の諸窯は、山口県域の窯業史の中で特異な位置を占める。

多田窯：1700（元禄 13）に京都の陶工丹波屋安兵衛を招き、城下の近郊多田に築窯。茶器などの御用焼を焼成。1795 年（寛政 7）廃窯、1805 年（文化 2）再興、1809 年（文化 6）廃絶。窯跡は未確認。

吉向窯：藩窯多田窯の廃止後、1834 年（天保 5）に大阪十三の陶工吉向治兵衛が招かれ川西の道祖谷に築窯した。藩窯の再興を意図したもので、参府献上用の茶碗を焼いた。1836 年（天保 7）以降は吉向個人の民窯と考えられ、製品には、吉向の得意とした交趾風のものや楽焼などの軟陶が多く、黄釉や緑釉をつかった鮮麗な色彩に特徴がある。窯跡は消滅。

磁器生産

文化・文政期（1804～29 年）になると、村田清風が主導する藩政改革（国産政策）の一環として、萩の小畑（おばた）に磁器窯が興り各地に普及した。これらは、京焼風の磁器を作った寿丘山国本窯（吉田道亭、萩市）の初期を除き、大半は肥前系の職人・技術の導入により開窯されたものである。幕末になると、北浦の諸窯（下関市豊北町）や戸田窯（周南市）などで、筑前須恵や伊予砥部（とべ）の職人・技術の導入もみられた。

【北浦の諸窯（下関市豊北町）】

原窯：1854 年（1854）開窯。庄屋福澄治兵衛と畔頭和田孫四郎が筑前国須恵村より陶工秋枝勇吉を雇入。はじめ 5 房の陶器窯であったが、慶応元年（1865）から 7 房の磁器窯とした。1896 年（明治 29）には錦手専用の窯を築いた。明治 20 年代が最盛期で住宅 13 軒、職人 50～60 人がおり、「北浦焼」として名を高めていた。大正 12 年頃に廃窯。

窯・物原・職人小屋跡・作業場跡・土漉し場・井戸・墓地など当時の窯場が完存。窯は大口＋7 房の連房式登窯。全長約 27m。幅第 1 房で 3.8m、窯尻部で約 5m。物原は窯の西にあり 15×7m の規模。窯の北側のひのき林の中が職人小屋の跡。その西側に作業場があった。

〔北浦の主要な窯〕

窯名	開窯	経営・技術の導入・製品・販路など	廃業
境下窯 (滝部)	明和年間 (1764～72)	磁器窯(陶器窯)。飯田宗一のち内田家経営。有田の森本七作来る。物原一部残存。 徳利・花立・茶碗・皿・箸立て等。	明治初年頃
中原窯 (滝部)	不明	磁器窯。西村家経営。西村伊兵衛、肥前弓野から古瀬虎七を招く(弘化3年)。窯場(窯・山神・墓・皿山内諸施設)完存。茶碗・鉢・皿等。二見港から下関の間屋に出荷。	大正13年頃 (1924)
神田口窯 (滝部)	明治35年 (1902)	陶器窯。伊予の人伊藤宗太郎が経営。日用品。	明治45年頃 (1912)
向坊窯 (栗野)		陶器窯。数件で共同経営。日用品(皿・茶碗・徳利等)。	明治42年頃 (1909)
宝蔵窯 (栗野)	幕末	陶器窯。和田理介ほか2名経営。窯跡(6房、17.5m)、物原残存。日用品(皿・茶碗・徳利等)。	明治10年頃 (1877)
窯蓋窯 (神玉)	文久2年頃 (1862)	陶器・土器窯。小山百合之助経営。窯跡(推定7～8房、23m)、物原、溜池残存。	明治28年 (1895)
島戸窯 (神田)	元治元年 (1864)	陶器窯。西仙蔵経営。遺構は宅地により消滅。茶碗・湯呑・皿・徳利・線香立て等。	明治10年頃 (1877)
飯の山窯 (阿川)	弘化3年頃 (1846)	磁器釜。萩小畑(深川)の蔵崎貞之進が移住。阿川毛利家の御用窯。窯跡(8房、29m)、物原残存。茶碗・皿・鉢等。明治中期には朝鮮・中国に輸出。	明治2年 (1869)
下大田窯 (田耕)		陶器窯。明治30年頃まで瓦窯。 皿・鉢・花立・植木鉢・焼酎瓶等。	明治20年代
大庭窯 (田耕)	明治10年頃 (1877)	陶器窯。伊予の沢田光蔵が来たと伝える。	明治20年代
原窯 (田耕)	安政元年 (1854)	磁器窯。和田(児玉)・福澄家。筑前須恵の秋枝勇吉を雇用、また、肥前弓野、有田に技術を習う。 窯場(窯跡・素焼窯跡・物原・職人小屋跡)完存。 染付けの茶碗・皿が多く、豊前・朝鮮に出荷。	大正12年頃 (1923)

藩窯と民窯

近世の窯業生産は経営的側面から藩窯と民窯とに分けることができ、製品の用途によって御用窯と産業窯とに分けることができるが、その実態は多様である。同じ藩窯でも、萩松本窯(萩藩)や多田窯(岩国藩)は御用窯の性格が強く、窯場の営繕や陶器生産に必要な資材・人夫などをすべて藩が賄った純然たる藩窯であったが、深川三之瀬窯(萩藩)は自分焼を認められていたし、鷹山窯(長府藩)は、民間資本を導入し営利目的を前面に出した藩窯であった。

また、藩窯的なあり方は萩藩の上級武士の間でも行われた。一門である阿川毛利家の飯ノ山窯(下関市豊北町)、益田家の須佐唐津窯(萩市須佐)、堅田家の戸田窯(周南市戸田)、山内家の窯屋窯(長門市)、栗屋家の赤崎窯(長門市日置)がそれである。これらは、単に御用窯的な側面よりむしろ、知行地経済の振興を目的とした営利性の強いものであった。

近世前期に創業した窯は純然たる民窯は少なく、上記の経営形態が普通であったが、幕末期には商業資本や富農層による窯の経営が多くなった。萩小畑や北浦の磁器窯、佐野窯などがその事例である。これらの窯場は、藩庁物産方支配下でその生産や販路には藩の統制があったと思われるが、民間の窯業生産への藩の関わりについては不明な点が多い。

このような明治期の窯業生産は、しかし、全般的にみると、生活様式の変化による需要の増加および県の産業振興政策のもとで、一時的には盛況であったといえる。しかし、小規模で技術革新を図る条件下になかった県内の窯業生産は、量産体制と広域の流通圏を古くから確立していた有田や瀬戸の製品の流入には対抗できずしだいに衰退し、1918~19 年の大正不況を境に県内の大半の窯場は廃業し、営々と続いた県域の窯業生産の流れもここに終焉を迎えた。現在は、茶陶を中心とした陶芸に転換した萩焼、日用陶器生産の堀越焼、土管等の末田焼などが陶業を続けている。

【硫酸瓶製造】

明治期の特異な窯業生産に小野田（山陽小野田市）の硫酸瓶製造がある。

硫酸瓶は、1889 年（明治 22）に設立された日本舎密製造会社（現日産化学小野田工場）の硫酸や硝酸を運搬するために新たに出現した器種で、焼酎や醤油などの容器としても利用された。

山陽小野田市旦には、江戸時代末期に萩藩士佐世彦七が周防富田（周南市）の陶工甚吉に開窯させた旦焼があり、1881 年（明治 14）には、セメント製造会社の徳利窯製造を契機として赤煉瓦製造も開始されていた。硫酸瓶製造はこのような技術的な素地と、耐酸性の高い陶土及び地元化学工業の需要に支えられて旦一帯で開始されたものである。

1891 年（明治 24）から製造が開始された日本舎密の硫酸・硝酸は、当初ドイツや信楽から容器を取り寄せていたが、搬送のコスト高のため、地元の旦で製造することになった。1893 年（明治 26）に試作に成功。以来、日本舎密製造会社の発展とともに硫酸瓶の需要も高まり、旦を中心に多くの製造所がつくられた。また、焼酎瓶は、1914 年（大正 3）から、門司大里の日本酒類醸造の焼酎容器として製造が始まった。1918 年（大正 7）には西高泊に関門窯業（昭和 10 年から帝国窯業と改称）が設立され、従業員 160 名規模で製造を行った。

小野田の製陶業は、化学工業業界の好不況に左右されながらも、概ね戦前・戦後を通じて盛況であった。1944 年（昭和 19）の硫酸瓶製造は年産 78 万数千本、戦前の生産実績は全国生産数量の 70%を占めていた。戦後の 1951 年（昭和 26）の工場数は 30、従業員約 970 人、陶瓶製造数 120 万本で有力な地場産業であった。しかし、この頃から、硫酸・硝酸の容器としてステンレスやポリエチレンなどが出現、さらに焼酎瓶はガラスの 1 升瓶となった。輸送手段も汽車やトラックに移り、このため、1955 年（昭和 30）前後から、小野田の陶瓶工業は次第に廃業に追い込まれた。

小野田の硫酸瓶製造は、近代化学工業の進展にともない新たに出現した特色ある近代窯業であった。

参考文献

- ・渡辺一雄(編)『生産遺跡分布調査報告書―窯業―』 山口県教育委員会 1983 年
- ・渡辺一雄 「窯業」『山口県の近代化遺産』 山口県教育委員会 1998 年
- ・『山口県史 資料編考古 1』 山口県 2000 年
- ・渡辺一雄 「窯業遺跡からみた山口県域の窯業」『地域文化研究 17』 梅光学院大学地域文化研究所 2002 年
- ・渡辺一雄 「生産遺跡解説」『山口県史 資料編考古 2』 山口県 2004 年
- ・『陶窯跡群 I』 山口市教育委員会 2011 年

* 個別の参考文献は省略しました。上記の文献に明示しています。

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第8号

発行年月日	2013年3月
編集・発行	土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上891-8 TEL 083-788-1841・1842 FAX 083-788-1843
印刷	株式会社吉村印刷 〒750-0004 山口県下関市中之町5-9 TEL 083-232-1190 FAX 083-232-1189
